

# 甲州人の県民性と政治風土

椎 名 慎太郎

## はじめに

本稿は、2017年後半に筆者が担当した「やまなし学研究」の講義、「やまなしの風土と政治」の準備と講義を進める中で、そして終わった後に考えたことをまとめたものである。7回の日程とテーマは文末に収載しておいた。

甲州人といっても、現在の山梨県民には、全国の中でとりわけ異質な部分はないように感じられる。例えば、いま、山梨県民の勝負事への好みはそれほど顕著ではない。ただし、35年余り前に東京から移住した当時、選挙のときに、普段は決して政治的でない人々が突然活性化する、つまり勝つか負けるかに熱狂するという風景に驚き、とまどったことを思い出す。本文でも取り上げる無尽が盛んであるというのは、やはり、全国でもあまり多くない特徴である。ヤクザでもないのに親分子分関係が言われるのも不思議である。テレビの普及や SNS を通じた双方向の交流拡大、県外生活体験を持つものや他県からの流入人口増加などにより、表面的には一昔前の「甲州人」らしさが薄まっているようではあるが、地域社会のあり方などにはその痕跡を見ることが少なくない。本稿は、2018年初頭という時点で改めて甲州人の県民性、つまり、集団としての山梨県民の特徴を考えてみることを目的としている。

## 1 稲作農民的ではない要素への注目

### (1) 予備的考察

県民性といってもかなり多面的なものであるのだが、その中で私が注目してきた「山梨の県民性のなかの稲作農民的でない部分はどこから来たのか」という仮説を、今回の講座の裏側に流れる一つの共通課題として検討してみようと考えた。この要素が存在するひとまずの理由を考えると、次のようなことが挙げられる。

① これは、稲作に適した広い平野がなかったこと、山が多く、谷筋ごとに成立した集落構造、とくに江戸後期になって稲作よりは商品作物に特化した（むしろ、「特化させられた」と言った方がいいかも知れない）経過を先ず指摘できる。ここでいう商品作物

とは、桑であり、それで育てる蚕である。そして、商品として売れるのは絹糸、絹織物ということになる。ここで、この労働を担ったのが女性であったことを忘れてはならないだろう。

② さらにそれを補うものとして、山の民の移動性がかなり影響していると考えられる。平地の農民は、戦国時代後期から、原則として農耕の基礎となる地域からの勝手な移動を制限されたが、山の民は、山の仕事なくなる冬季を中心に、木工製品などを背負って行商が許されていた。漆の生産と流通も山の民の仕事である。これは、尾根筋の移動は関所などで規制しようがないという面と、山の民が尾根筋経由の交通手段で他の地域を訪れて、そこで見聞きしたことを情報として利用するという面があった。早川町で、伊那が通婚圏であると聞いたことがある。

山の民の中には、従業員を抱えるほど大規模な林業経営者も含まれる。網野善彦先生が『甲斐の歴史を読み直す』（山日ライブラリー、2008年）で引用している関口博巨氏の「甲州山村の家抱とその自立」（山梨県史研究5号1997年）は、現在の南部町で大規模に林業を営んでいた佐野家の豊かさを明らかにしている。

③ 博打うちの多い地域性というのも、現在の政治に関係がある。たしか、3代前の県知事は「ばく好き」で知られていた。直接博打とは関係ないが、山梨の特徴を凝縮した政治家金丸信の「やくざ的」迫力には、どこかこれに通底するものがありそうだ。

これは、商品作物の集積地を中心に現金が集まり、それを狙って賭場が立ったことが直接の原因だと考えられる。これと、天領で代官支配地であったこと、そのため不足する警察力を親分子分関係で成り立つ実力組織が補っていたことがヤクザの多かった理由だとされる。山梨に来て驚かされたのは、親分子分という関係がいまも生きていることだった。これはヤクザの親分子分とは直接関係ないことではあるが、人間関係のあり方として、経済的なものを越えて、一部人格にまで及ぶ支配と依存という関係を意味するこの言葉が持つニュアンスにはひとまず注目しておきたい。

次に、商品作物の栽培と成果品の流通に伴って現金が動く。この金の流れと博打は濃密な関連がある。本当に貧しい山村では博打で投機に使う資金の流れも細い。江戸末から明治中期まで甲州は周辺地域より豊かであったという観察が少なくない。商品作物が多く、その流通の拠点であった石和や鵜沢には自然に資金が、つまり、流通で儲けた商人が集まった。この資金を目当てに賭場が立つ。これをめぐってヤクザの親分が争う。こうしたことが、博打打ちの多い地域性を育てたのではないかと。ヤクザやその稼業としての博打と「稲作農民的でない」という特性とは、さらに根源的な関係を指摘されているのだが、それは後に述べる。

## (2) 山梨の地域特性は稲作農村型日本社会の典型から外れている

### A 講座の最初の2回で述べたこと

ここで、山梨県民の特性を形成した地域のあり方について、これを主として近世末期から近代初期にかけての歴史的事情との関係から把握する有泉貞夫さんの見方から学んでおきたい。これは有泉氏のかねてからの持論であるが、2005年のこの講座で3回にわたって「山梨の歴史的特性」を講義した記録（『山梨学院生涯学習センター研究報告』第19輯）を参考に、私が講義準備と実際の講義の中で考えたことを交えてまとめておきたい。

① 江戸時代の前半の一時期（柳沢吉里が領主であった時代）以外の大部分の期間甲州は天領であったために、明治維新と共に多くの士族（勤番士）が江戸などに帰ってしまった（山梨における士族の割合は、明治一桁後半で0・3%、全国平均5・3%）。そのために、在地リーダーがいない。不平士族もない状態であった。

この点は、藩の解体後も理論的指導者としての士族が多く残った信州とは対照的である。つまり、理屈を言い、筋にこだわる長野県民に対して、山梨県民は、没論理的、馴れ合い、力関係に敏感である。また、利に敏く、どのようにも変われるという特性をもつ。

② 山梨の位置と地形の規定性から生じた特性。盆地中央部を別にすると、谷筋ごとに集落が発達した結果として、地域社会が閉鎖的で、内部でまとまる傾向が強く、自分の考えより周囲と合わせることを重視する傾向がある。山に囲まれていて交通の改善や水害対策に金がかかること、中央に比較的近いからこそから資金を引き出すことに県政指導者は明治前期から眼を向けていた。

③ 山梨県の成立事情から生じた特性。長野県をはじめ他の多くの県がいくつかの藩の集合で、そのために他の地域と争い、競いながら調整する努力が必要だった。これに対して山梨は、明治3年（1870）に田安領が編入されたあとは、範囲が変わっていない。また、明治5年に税制改革に反対して起した大小切騒動で明治政府軍に徹底的にやられた影響で、反権力の志が育ちにくい地域となった。

④ 博打打ちが多い地域特性。これがどこから生じたかは、なお研究課題だが、天領で代官支配であったために治安維持に地域のボス（親分）を利用したこと、商品作物化が早く、現金が集まる宿場や河岸があったこと、江戸から追放されるヤクザなどが親分を頼って来る適当な距離に位置していたこと、などがとりあえず考えられる。

以上が、『山梨学院生涯学習センター研究報告』第19輯に収載された有泉説の要約である。今回の講義の総論としての第1回と、明治期から第二次大戦終了までの概説をした第2回の準備の中で私が気づいたことを若干付加しておきたい。

明治15年ごろ、全国の地方政府は自由民権運動をどう抑えるかに腐心していたが、

山梨では博打打ち対策がむしろ大きな問題で、藤村県令は、博打打ち対策について明治政府に対応を求め、政府は他県からの要請もあって「賭博犯処分規則」を制定している。博打打ちの問題は、当時山梨を調査に来た元老院議員渡辺清元も指摘している。

これに加えて、私が注目したこととして、小作争議の運動スタイルがある。これは、小作争議の組織原理としての共同体的しめつけや親分子分関係的上下関係がそこでの人間関係の基調にあり、これが山梨の戦後の労働組合運動にもかなり影響を残したと考えられる。

小作争議の発生は、日露戦争で同じ兵営などで暮らす中で各地の若い農民の情報交換が行われたことと関連をもつ。そこで自覚されたのは、全国多くの地域における農民に対する収奪の激しさであった。ここには、先進諸国が植民地の収奪で資本主義的生産のもとになる資本の蓄積をしたが、日本の場合は、貧しい農民からの収奪で資本蓄積を行ったことが表れている。5.5俵のうち4俵までが小作料という高いレベルはこれを物語る。このことを自覚し、兵役を終えて地域に帰った若い農民がやがて全国各地で小作争議を行うようになるのだが、山梨では、その運動スタイルに上述のような特徴があり、これが後に影響を及ぼした。以上のようなことを講座の1, 2回で話した。

## B 網野善彦さんが語っていたこと

稲作農民的ではない庶民像について、山梨出身の歴史家網野善彦さんが着目していたことを、講座が終ってから思い出した。筆者が2005年秋から始めた「教えて椎名先生」というFM甲府のワイド番組の中の小さなコーナーで、その話をして、それを2010年に本にまとめた『教えて椎名先生』（山梨新報社刊）に収めてある。そこにこんな一節がある。パーソナリティーの石部典子さんとの対談形式になっている。

**椎名** （網野先生が小学館の『日本の歴史』の一部として書いた『蒙古襲来』の）冒頭のところに「飛礫、博奕、道祖神」という章があります。飛礫（つぶて）というのは石を投げる一種のお祭りです。これをなぜ書いたのかというと、飛礫とか博打とか道祖神という言葉に表される、日本人の野性というものが、日本社会の至る所にあふれていた最後の時代が、この時代であったというんです。こうしたエネルギーの発散自体が、やがて農民が土地に定着させられることによって、抑えられていく。この変わり目がこの時期なんですね。

**石部** 私たちの感覚でいうと、農耕民族に「野性」という言葉は何か似つかわしくないような感じがありますが、それが現在の学界の一般的受け止め方なんですか。

**椎名** いいえ、多数説ではありませんが、そもそも日本が農耕民族中心というのは間違いだというのが網野さんの一つの仮説なんです。

石部 え？もうそこから。

椎名 農耕民族という面もあるんだけど、そこには漁業民もいるし、山で狩猟する人たちもいるし、通商で生活している人たちもいるし、色々な人がいたんだということです。それを農耕世界、つまり稲作農耕という世界に一元化するというのは、実はある価値観に裏付けられた間違いであるという、このことを徹底的に解明していただくんですね。

さらに、これも有泉貞夫さんの2005年の講義録にあるのだが、「民衆史研究家の和歌森太郎さんが晩年に都留文科大学学長になって山梨に来たばかりの時に、『山梨には中世が色濃く残っている』ということを書いていた」という。

「ここでいう中世というのは、農民もちゃんと定住して、おじいさんの代から孫の代まで一箇所に定住しているというようなのではない。水害だの天候不良なんかがあれば、そこからどこかへ移っていく、流れていく、そういう定住漂泊紙一重というような生活であり、それが当然の事としてやっていくような気風。さらにもっと以前の、農民ではない、狩猟民的な心性（フランス社会史でいうマンタリテ）、これが色濃く甲州には残っていたのではないかというのが、（山梨出身で網野さんと親類の付き合いをしていた）宗教学者中沢新一氏が話したことである」。

その中沢新一さんが網野さんへの追悼文としてまとめた『僕の叔父さん網野善彦』に、次のようなくだりがある。これは中沢さんが高校生時代に中沢家を訪ねて来た新一さんの叔父の網野先生と新一さんの父親で民俗学者でもあるある中沢厚さんの対話として収録されている。少し長いが、一部省略しつつ引用してみたい。

戦前戦中に日本の「国体」とされたものは、神格化された天皇が支配する国家のあり方のような、きわめて国家主義的な政治概念であったのだが、中沢厚さんは、その父（新一さんの祖父）で生物学者であった中沢毅一が1939年に発表した著作『我国体の生物学的基礎』の英訳の中で、普通には Structure of a State と訳されることの多い「国体」が、Country's Being と訳されていることに注目して、日本列島に縄文時代から住んできた人々の存在の上に乗っかる形で天皇制が支配を行ってきた、つまり、「縄文時代以来の Country's Being という厚い土壌の上に、天皇制は根を下ろした植物にすぎない」という話をする。

これを受けて網野さんは次のようにいう。「天皇がその Country's Being という土に根を下ろすやり方が、また実に独特だったんですよ。天皇はいろんな顔をもっていますからね。律令制を支える官僚組織のトップに立っているのも天皇ですし、穀物霊をお祀りする神主のトップに立つのも天皇です。とくに日本は稲束の数で租税を徴収していましたから、その稲の霊を祀る最高の宗教者という資格で、日本全国を支配する存在であるということ、アピールすることもできたっちゃうわけです。そういう場

合の Country といったら、これはもう水田の国、稲穂もたわわな瑞穂の国、という意味をもつことになるでしょうね」。

これを受けた中沢厚さんの次の発言が本稿の視点から極めて興味深い。「そこだよ網野君。甲州のようなところは、その言い方だと瑞穂の国に入らないってことにならないか。戦争の前は盆地から山間にかけて、ここではどこにいても桑が植えられていて、水田はわずかしかなかった。あとはパサパサした畑で、そこで雑穀をつくって、百姓はみんなホウトウを食っていた。戦争中に一時そういう畑に水を引いて、水田がぐっと増えた。これは国策によるものだったから、戦争がすむと水田ブームはたちまち去って、そこはだんだんと果樹園に切り替えられていった。今じゃあ、どこへ行っても桃や葡萄が栽培されている。あんまり水田や稲に執着していないんだなあ、このあたりの人は。だから、ヤクザとか甲州商人なんかが生まれるんだろうねえ」。

これに答えて網野さんはいう。「まったくおっしゃるとおり。農民のつくっていた作物は、じつに多彩だったってことが、だんだんあきらかになりつつあります。・・・日本人は米を食べるのが好きだというのは、ひとつの神話ですね。ですからさっきの話に戻れば、農業的でない日本というもうひとつの Country's Being があって、天皇はそこをもみごとに支配していたんです。これを『非農業』と呼ぶ歴史家もいます。ヤクザや商人はその代表です」。

網野さんによれば、Country's Being というのは一枚板ではなくて、二つあった。農業と非農業という二つの要素があって、天皇はその両方をうまく支配していたのだという。中沢厚さんの、「その非農業というのは、狩猟をしていた連中の末裔ということかい」という質問に、網野先生はこう答えている。「一概には言えませんが、そういう人たちの末裔が含まれていたことはたしかです。山の民とか川の民と呼ばれた人たちもその仲間ですし、海民なども非農業の典型です。また中世に諸職の民と呼ばれていた人々も入ります。彼らは土地をもっていません。そのかわり山や川や海で、農民がつきあっている自然よりも、もっと荒々しい自然とわたり合っているのですね。天皇はこういう連中からは、稲粍の形で租税を取るのではなく、山や川や海で採れる産物を、神様にたいするお供え物の形で、直接納めさせていました。・・・」

このあたりのやり取りを講座で生かせなかったことが悔やまれるが、私の「山梨の県民性のなかの稲作農民的でない要素」という認識が網野さんの考え方の中に明確にあったことが分かる。そして、山梨にヤクザが多いのも、前に説明した経済構造的な説明と合わせて、さらに深いところに別の理由があることが理解されるであろう。

ついでながら、古い時代の博打は、単に利益追求行為ではなく、その背後に、「偶然というものへの畏敬」があると説明されている。現在の反社会的集団にこのことはほとんど当てはまらないだろうが、淵源をたどるとこうした精神的営為に行き着くことは興味深い。

## 2 地域社会の特性と個人の中に見られる特徴

今回、7回の講座を準備しながら、甲州人の特性というものを考えるとき、その二面性にしばしば首をかしげることがあった。何かというと、例えば、甲州商人のような先進的な行動力と、狭い地域の内部で固まることの多い山梨の庶民の保守性が、共に指摘されるようなことだ。これを考えているうちに、地域社会、地域共同体としての特性と、その中から出てくる一人一人の特性には違いがあるのではないかと思いついた。それでも、甲州人が他の地域とは違う、集団としての人間関係を持ってきたことは間違いない。それを、「無尽」と「親分子分」という二つのキーワードから考えてみたい。以下の論述には、山下靖典『甲州人』(皓星社1983)と、内藤朋芳『山梨の県民性』(中央線社1985年)の二冊の資料をかなり参考にした。山下氏は広島県生まれで、1980年1月から1年半朝日新聞甲府支局に在勤、内藤氏もNHK甲府放送局勤務の経験があり、NHKが行った「県民意識調査」に関わったことからこのテーマに興味をもち、多くの文献を精査して山梨の県民性を歴史的に分析している。

### (1) 無尽について

現在の「無尽」を他県人のために説明すると、その起源であった相互金融の意味はほとんどなくて、地縁や同窓、職場などで親しくなった者たちが、例えば1ヶ月に1回、多くは決められた寿司屋や蕎麦屋などに集って酒を飲んで親交を確認する集まりである。飲み会ではなく、旅行などのレクリエーションが目的の場合もある。山下氏が書いているように、地域から政治家になろうと志す者は、さまざまな縁を頼って多くの無尽のメンバーになり、そこで人間関係を集票に生かすことにもなる。参考にした二冊の本が書かれた当時の河口親賀甲府市長は138の無尽に入っていたという。また、無尽という思想信条を問わない人のつながりが党派を超えた人間関係として現職知事の幅広い支持基盤となることも指摘している。

当時の望月幸明知事の加わる無尽「ルーツの会」には、知事後援会幹部のほか、自民党副総裁金丸信の後援会幹部、社会党県議、さらには県の幹部まで加わっていた。これは現職知事の対抗馬として望月をかつぎだした超党派の人脈そのものである。これの裏側に望月知事の前の田辺国男知事を支えていた「Aの会」と呼ばれる無尽があった。この無尽には、田辺知事の秘書などと共に、後の「ルーツの会」に加わる複数の社会党県議がいた。この無尽が1977年10月の例会以後、ぱったりと開かれなくなる。これは、後に田辺知事の対抗馬として望月候補をかつぎだす動きと関連していた。

ただし、無尽の多くは政治的意味合いをもち、純粋な親睦が目的だ。だが、そこにはそれなりの存在理由がある。甲府は、愛媛県今治、福島県会津若松とともに「無

尽三都」と呼ばれる。この三都市の共通性については、こんなことが言われる。いずれも経済活動の中核となる大企業がないが商人の多い町で、中小企業主が地域経済を担っている。この中小経営者は情報を必要としており、その情報交換の場として無尽が利用される。

同時に、土地の人々の結束が固く、内部でまとまって外部と対抗しようとする傾向がある。これは、古くから同じ地域に居住してきた者が生業の中で築き上げてきたものでもあり、姻族をふくめた血縁関係の根強さも同じ理由であろう。筆者は、街を走る観光バスに「何々家いとこ会御一行様」という表示を見たことがある。このような内部の結束の固さは、外から来る者への排他性という反面をもつ。「来たり者」という言い方は、一部の人をこれを差別用語と区分しており、最近ではあからさまには使われないが、土着の人々の心のどこかには存在し続けているであろう。

## (2) 親分子分関係について

「親分子分」は、もともと地主と小作人の支配＝被支配関係をもとにした関係であった。親分＝地主の田植えの手伝いが済まないかぎり自分の田植えはできないという関係は、子分が親分に尽くす代わりに、子分が不作などで困った時には地代を安くしたり、冠婚葬祭で世話をしたりなどの恩恵をほどこすということ成り立っていた。

これについて社会学者福武直さんが、こうした「自主防衛的な」関係は零細な農村社会に共通する人間関係であるという見方を示していると山下氏は解説しつつ、それだけ山梨は貧しかったのだと言っている。筆者は、単なる貧しさではなく、山がちで耕作面積規模が全国平均よりかなり小さい土地柄がより大きく影響していると考えている。山梨県民がもってきた貧困県という意識については、次章で再度考えることとする。

この地主＝小作関係は、戦後の農地改革でほぼ消滅した。だが、1980年代初めの段階でこれが薄められた形ではあるが、なお残っている場合があると山下氏は書いている。これとは別に、仲人を親分にした新たな親分子分関係が育っていることにも注目している。これは、以前の地主＝地域社会の名望家が変わって、政治や経済での指導的人物を仲人＝親分として関係を結び、現代社会における口利きなどの利益を得る反面として、親分ないし親分の縁者が選挙に出た場合にはもっとも身近な支援者として応援するなどの奉仕をするというのだ。これについては、第4回の「1991年県知事選に見る山梨の政治力学」に関連して、金丸信元代議士の話をした中でふれた。

内藤氏は、次の二つの要因が県民性の形成に寄与したと書いている。

- ①狭い県土が形成したもの＝自然環境因子・広い土地がなく、山と川で区分されて、小規模共同体を作らざるを得なかったこと。
- ②人為的因子＝この地域の歴史的要因・武田時代の戦乱の継続と、徳川幕府直轄地と



なったことによる役人の圧政により、地域共同意識が形成され、狭い範囲での強い団結と外に対する対抗意識が形成されたこと。

内藤氏によれば、武田三代（信虎、信玄、勝頼）の1509年から1582年までの74年の間に大小83回の戦争（出陣、戦闘）が行われている。江戸時代になると柳沢吉保、吉里の短い時期を除くとほぼ幕府直轄地であり、とくに後半期は各地域の代官支配が続いた。代官支配担当者は任期が終れば当該地を離れて江戸に戻ることに決まっていたために、長期的視点での地域統治を考えず、苛斂誅求が行われた。これに対する地域共同体の規模は小さく（小村）、それ自体が運命共同体として、生き残るためには、この運命共同体への絶対的帰属しかなかった。内藤氏は、これについて「県人の強い地域との密着性、集団性、付和雷同性、視野の狭さ、物質的側面の重視（即物性）は、この時代にますます強くなったと思う」としている。

### 3 「山梨は貧しい」という意識はどのように生れたか

山梨が日本の府県の中で相対的に貧困化した理由は以下に述べる二つの要因に求められると筆者は考えているが、そこには実態以上に自分たちを「貧しい」と受け止める県民性も加わっていることを指摘しておきたい。

#### （1）災害の連続

明治中期以降、くりかえし災害が山梨を襲った。明治末年の2回の大水害はよく知られているが、実は明治中期から災害がしばしば山梨を襲っていた。その原因は、山林の荒廃であった。山林の荒廃をもたらしたのは、第一に、近代産業に不可欠な大量の燃料を盆地周辺などの山林から切り出す木材に求めたこと、第二に、それまで入会林として地域住民が共同で利用し、それなりに管理が行われていた山林の官民領有区分の問題でほとんどが国有林とされ、皇室財産であるご料林として入会が禁じられたことから、乱伐、盗伐が行われ、管理がなされなくなったことであった。

藤村県令の開始した殖産興業で絹糸、絹織物が盛んに生産された。このためには蚕を育成する必要があるが、寒い時期に蚕室を温めるための燃料、そして、繭から絹糸をとりだすために繭を煮る燃料が大量に必要となった。他の絹織物地域と比べて山梨には鉄道がひかれるのが遅くなり、鉄道で運ばれる石炭の導入が遅れたことが山林過伐採に輪をかけた。

入会林の官有は、藤村県令が県民のためにやった（民有にすると税金がかかる）とされてきたが、最近の研究では県民を騙したという面が強いとされる。明治初年の地租改正で、宅地や農耕地（田畑）の税金については大小切り騒動の延長でありあまり抵抗なく受け入れられたが、山林の地租改正になって異なった局面がでてきた。山梨県の総

面積のうち山林原野はその4分の3を占め、その7割が入会地であった。これらの土地は近在の村々がわずかな小物成（山年貢）を納めて共同管理し、生活に必要な草木を採取していた。これを官有にするか民有にするかが問題であった。藤村県令の当初の伺いに対して中央政府の内務省は、官有になっても従来の入会は可能と返事をしてきたが、実際に官有になると、入会は許可しないということになったというのが従来の説明だが、どうやら藤村は、官有にしたうえで県が払い下げを受けて開発をしようとしていたらしい。藤村は1888年段階で、笹子峠の切り下げによる京浜地域への交通路確保、野呂川疏水開削、蒸気船による富士川経由での船便確保など、大規模な総合開発計画を持っていた。

山林荒廃による水害の連続は、やがて明治末年の2度にわたる大水害という結果につながった。

## （2）甲州財閥による収奪の構造

明治後期から大正期にかけて若尾逸平や根津嘉一郎などの「甲州財閥」が、山梨で生じた利益を東京など大都市地域に投資してしまったことが明治中期以降の貧困化に大きな影響を及ぼしている。講座でも話した通り、明治前半期までは、隣接する神奈川県と比較してもやや豊かな県土であった。これを貧困化させたのは、打ち続く災害と共に、甲州財閥による富の県外流出であった。

甲州財閥は県内の小作料や製糸業で得た利益を東京や関西圏の電灯、鉄道、住宅開発などへ投資して利益をあげた。だが、これを地元に還元する率は小さかった。若尾逸平に比べると、根津嘉一郎は県内にあれこれと寄付をして少しは収益を戻しているが、全体として見れば貧しい県民が稼ぎ出し、地代や小作料として支払うことで蓄積された資金の相当部分を県外に持ち出してしまった。

この経済構造は、世界経済における南北問題と共通する現象である。アメリカが中南米で農民を搾取して利益を本国に持ち帰り、英仏がアフリカやアジアで得た利益を自国の繁栄に使った構造と基本的には同じである。高度成長期の日本も東南アジアに投資して巨大な利益を上げていた。1968年に筆者がある仕事でフィリピンに行ったときに現地通貨の1ペソは80円～100円だった。いま、1ペソは2円強である。これはフィリピン人の収入と日本人の収入の比を示している。1968年に1対1だったとして、現在は、半世紀以上にわたる日本への富の移転によってこれが40対1になってしまったということを意味している。

南北問題ほどの過酷な収奪ではないが、これと同じ構造で山梨は財閥に搾取され、疲弊して行った。もちろん、打ち続く水害の影響もあったし、中央政府の厳しい徴税政策も響いたのではあるが。明治中期まではひとまず全国の平均以上であった山梨の経済的地位はその後急速に落ち込んでいくことになる。

### (3) 文化性の欠乏について

山梨が経済的に落ち込む以前から、物質文化はともかく、精神文化が貧しいと指摘されている。

板垣退助は、維新の内乱でいち早く甲府に入城した、後の明治政府軍の指揮官だった。その板垣が、明治13年(1880年)に自由民権運動の遊説で山梨に来て、土佐に帰ったあと、山梨のことを語る中で「文化欠乏の弊」つまり、物質文化はそれなりに育っているが、精神文化の面が貧しいという印象を語っている。これは板垣だけの印象ではなく、望月直矢は『峡中沿革史』(1888年)の中で、維新から20年の間に「有形開化」は迅速に進んだが、「無形文明の進歩は遅々である」と書いている。時代は下るが、昭和初年の官選知事土屋正三は、以前に在職した岡山と比較して、「岡山には文化があるが、・・・甲州には文化がありやせん」と語っている。

江戸時代後期の甲府は、勤番支配ではあったが、それだけに勤番士の去来とともに江戸と直結する部分があり、新しい芝居の演目なども甲府で試しに上演して、評判が良ければ江戸で本格的興行を行ったという話が伝わっている。俳諧や学問などの他の分野でも、大家が来甲し、「目には青葉・・・」の山口素堂などを輩出している。つまり、文化的には先進地であったことになる。

その甲州が明治期になぜ文化貧困の地になったのか。いくつかの理由が考えられる。

第一に、初めに書いた通り、この地には藩主を中心とする在地武士が層として存在しなかったこと。明治維新で体制が変わると、勤番やその家来たちはみな江戸などの根拠地に帰ってしまった。武士は、江戸時代には教養人の代表であり、隣県長野ではこの人々が近代化以降の地域のリーダー、とくに教育面で指導的役割を担った。こうした文化面の指導層を欠いたことが山梨の文化的貧困に大きな影響をもたらした。実際に、士族知識人の払底のために、実力ある教員の確保難に藤村県令は頭を悩ませた。そのために藤村は1873年10月に文部省督学局に、前年から東京師範学校(後に東京教育大学⇒筑波大学)に派遣している県出身学生4名を卒業前に県に帰らせて現場教員の指導にあたらせたいと申し出たほどである。この申し出は許可されなかったが、4人が翌年3月に上等小学科を終えて帰ると、直ちに4人を教師として山梨師範学校を開設して、県内172校の教員の現職教育にあたらせて急場をしのぐほどであった。

第二に挙げられるのは、明治初年の大小切り騒動の影響である。これについては詳しい論述は避けるが、1872(明治5)年という、いささか早すぎる段階での民衆の蜂起に対して、明治政府とその意を受けた当時の県庁は徹底的な弾圧をした。これによって、いったんは権力に立ち向かった庶民の志は見事に打ち砕かれてしまった。これによって、理想よりは現実、精神的価値よりは即物的価値、自立ではなく服従をよしとする傾向が生まれたとされる。

## まとめ 甲州人の特性と山梨の政治風土

講座全体を通じて、筆者は甲州人の県民性をやや批判的に分析した。これは、現状の追認では学問的分析につながらないからであって、実のところでは、そのバランス感覚や事態の変化への即応性など、東京で生まれ育っていささか融通がきかない自分の姿と対照的な部分に感心している。

いま、改めて甲州人の特性を考える意味はどこにあるのだろうか。本稿で取り上げた「稲作農民的でない部分」、別の言葉に置き換えれば、理詰めではなく、その場で臨機応変に行動する傾向、計画的な積み上げよりは一発勝負を好む傾向、先ほどの網野さんの言葉を借りれば、ヤクザや甲州商人につながる特性がいま発見できるだろうか。講座の第3回目でお話した1950年代の山梨県教職員組合の柔軟な戦術、第4回目でお話した1991年の県知事選で、「草の根」の運動で圧倒的不利を逆転した対応力あたりに、その表れを見ることができる。

ただし、強さと弱さは裏表であって、1950年代に、中央政府の圧力もあって硬直的になりがちな勤務評定や学力テスト問題を切り抜けた組合運動は、これを可能にした一要素として、内部の議論の封殺というマイナス面を伴っていたのではないだろうか。今世紀初頭に政治問題化した政治資金問題や、講座参加者で教員組合運動経験者から発言があった、物が言いにくい現場の雰囲気は、内部で固まる傾向とそこで人間関係が上意下達になりがちという山梨の地域社会の負の側面が機能社会にまで及んでいることを意味しているように感じられる。

7回の講座で底流にしたいと考えていた甲州人の特性に関する私の仮説は、第5回目以降の話の中では、それをうまく引き出すことができなかつたのではないかと反省している。1991年知事選を契機に政治における神通力を失った金丸信元代議士のような、典型的な甲州人を見出すことは難しくなっているのではないか。その意味では、これまでの山梨の政治風土が、変わりつつあることは事実で、これが明確に出ていたのが第6回目に話した明野の産業廃棄物処分場問題である。

この問題の経過には、当初地域の「意思」を決めた戸主層の古い体質と、産業廃棄物処分場がもつ危険性に気づいて反対運動を開始した若い層や女性たちの新しい感覚との対立構造がある。たしかに、測量を認める段階で県と秘密合意をした当時の村の支配層には、単なる利益政治の枠組では理解できない、権威への盲従という古い感覚が見られる。だが、これを批判して反対運動のリーダーを村長に押し上げた人々の意識には、それ以前の山梨県人にはなかつたものが育っていると感じた。

これと対照的に、いったん決めたことを無理押しし続けた県官僚層の意識には、変わらない権威盲従、お上意識の残存を指摘しなければならない。県庁内で方針に批判

的な発言をする者は、昇進を拒否され、あるいは、閑職に追いやられたと聞く。こうした古い体質を抱え込む政治風土を、われわれ庶民はさまざまなチャンネルを通じて変えていかなければならないだろう。

いずれにせよ、人生の晩年でこうした機会を与えられたことは大変ありがたいことであった。ひとまず語り終えたいま、36年前に山梨という活動の場を与えられたことが、本当に幸せであったと振り返っている。

#### 主要参考文献

- 網野善彦『甲斐の歴史を読み直す』(山日ライブラリー、2008年)  
有泉貞夫『私の郷土史・日本近現代史拾遺』(山梨ふるさと文庫、2012年)  
有泉貞夫『山梨の歴史的特性』(『山梨学院生涯学習センター研究報告』第19輯、2008年)  
有泉貞夫『山梨県の百年』(山川出版社、2003年)  
有泉貞夫『山梨の近代』(山梨ふるさと文庫、2001年)  
飯田文弥ほか『山梨県の歴史』(山川出版社、1999年)  
椎名・石部典子『教えて椎名先生』(山梨新報社、2010年)  
椎名「山梨の教育史」山梨学院生涯学習センター紀要『大学改革と生涯学習』5号、2001年)  
椎名「山梨の政治を考える」(甲斐ヶ嶺15号、1993年)  
椎名「山梨が変わり始めた」(甲斐ヶ嶺2号、1991年)  
山下靖典『甲州人』(皓星社、1983)  
内藤朋芳『山梨の県民性』(中央線社、1985年)  
中沢新一『僕の叔父さん網野善彦』(集英社新書、2004年)  
『山梨県史』(通史編5・2005年、通史編6・2006年)

以上は、あくまでも活字になった主要な参考資料であり、今回の講座の全体像を考える上では、さまざまな機会に集めた雑多な資料と、それを時々総合化して私の中の「やまなし」をめぐる発想を形成した体験が重要な意味を持っている。一例を挙げれば、2006年10月3日に県民コミュニティー・カレッジのコラボレーション講座(県内各大学から講師が出て5回の講座を担当)の「甲州山物語」で担当した「山で暮らす」という講義について、残っているメモの冒頭に次のような意図が書かれている。

#### 1 今回の話の目的

- \* 山が暮らしの場であったこと
- \* 平地の農民とは違う世界があったこと
- \* 日本の庶民のなかにある多様な生活を知ること
- \* 早川町奈良田を中心とする山の民の半世紀前の生活を通じて、甲州人の特性の一面である、稲作農民的ではない部分(定住的⇔漂泊的・流動的、篤農⇔商業的・投機的)を知ること。

この発想は、今回の筆者の構想の出発点を示しているが、これをどこから思いついたかは、既に10年以上を経過して分からなくなっている。同じく、2005年に女性団体からの依頼で話した「山梨の政治風土と女性」という講演のメモにも、この論文の内容と深くかかわる内容が多く含まれている。この講演にどんな資料を使ったかは、同じく不明である。

参考のために、今回の日程とテーマを記しておく。

やまなし学研究2017 後期コース：山梨の風土と政治

	日 程	テーマ
①	9月20日（水）	私のやまなし学事始め—山梨を捉える基本的視点
②	10月4日（水）	山梨の明治から昭和前期までの政治と社会
③	10月18日（水）	山梨の教育と政治
④	11月1日（水）	1991年山梨県知事選に見る山梨の政治力学
⑤	11月15日（水）	山梨の過疎地対策と千代田湖ゴルフ場問題
⑥	11月29日（水）	廃棄物処分場問題に見る山梨の政治
⑦	12月13日（水）	山梨の文化財保存と政治力学